

【外来（腎臓病外来）】

腎臓病外来では延べ1,649名（前年度 1,585名 対前年比+4%）を診察。

慢性腎臓病（腎硬化症、慢性糸球体腎炎、糖尿病性腎症、多発性のう胞腎、間質性腎炎、腎移植ドナーなどの片腎、ネフローゼ症候群など）や、健診後の蛋白尿や血尿の精査、急性腎障害や慢性腎不全の急性増悪、電解質異常（GITELMAN症候群など）の精査治療、糖尿病、脂質異常症、高血圧症、などがその内訳であった。そのうち1割が、CKD（慢性腎臓病）連携パス使用外来患者（延べ175名（前年度175名）であった（参考：2009年7月～2019年3月 CKD連携パス使用 延べ1,444名）。

〈上天草地区CKD連携パスについて〉

2008年当時、熊本県は全国的に見て人口当たりの透析患者数が多く、その熊本県の市町村の中でも上天草市は多いことから、地域の開業医の間で透析導入となる患者を減らしたいという熱意が高まり、CKD患者を腎臓専門医と共同診療する上での疾患管理ツールとしてパスを共同で作成、2009年運用開始となった経緯がある。それから約10年継続してパスを用いて当院とかかりつけ医とで連携し、CKD疾患管理を行っている。これまで延べ100名のCKD患者にパス適用し、現在52名の患者を共同診療している。

2014年までの検討にて、CKD診療を当院専門医で行っている患者群と比較しても、経過中腎機能の改善が見られる割合はパス使用群でも同等に認められ、開業医と腎臓専門医との共同診療にパスは有用であることが示された（第59回日本腎臓学会学術総会において「熊本県上天草地区CKD連携パスの現況と成果」との演題で2016年6月発表）。

パス使用の効果としては、血圧コントロールもパス使用群は良好であることがわかり、CKD患者教育においても、かかりつけ医との併診の有用性が示唆される。2016年1月より、随時尿による1日塩分摂取量をパスに付記した。

地域の開業医とのパスについての検討や、上天草地区CKD連携パス運営会主催のCKDに関する学術講演会も毎年定期的に開催している。

今後も引き続き、連携パスの継続と改訂に取り組んでいきたい。

【入院担当患者概要 全211名

（前年度 194名、対前年比+9%）】

疾患別患者数の内訳をみると、腎臓内科系疾患（腎炎、ネフローゼ症候群、腎不全（急性、慢性）、尿路感染症、電解質異常・代謝性疾患など）が4分の1を占めた。

疾患別に見ると、呼吸器疾患や脳血管疾患や循環器疾患が増えた。

以下の（ ）内は前年度

・腎炎、ネフローゼ、腎不全	22名 (25名)
・尿路感染症	11名 (12名)
・電解質異常・糖尿病など代謝性疾患	20名 (26名)
・泌尿器科疾患	12名 (11名)
・脳血管疾患	36名 (32名)
・循環器疾患	32名 (25名)
・整形外科疾患	12名 (17名)
・呼吸器疾患	42名 (27名)
・消化器疾患	10名 (12名)
・その他の疾患	14名 (7名)

〈多発性のう胞腎に対するトルバプタン内服の導入〉

クリニカルパスを使用し、入院にて多発性のう胞腎に対するトルバプタン（サムスカ®）内服の導入を2015年度から開始し、5名の患者に導入を行った。2018年度は新たに1名を導入した。腎容積増大率の減少および腎機能障害進行速度の抑制を期待できる。

〈CKD（慢性腎臓病）患者に対する教育入院〉

クリニカルパスを用いたCKD患者に対する教育入院を2016年度より開始。

医師、看護師、薬剤師、検査技師、理学療法士による地域医療のニーズに合った教育指導を行っている。

〈腹膜透析外来〉

2016年度から済生会熊本病院の協力のもと腹膜透析外来を開始。血液透析への移行が1名あったが、現在1名の患者が通院されている。